

思いやりで、「明るいまち」をつくる。

皆さんは「社会を明るくする運動」を聞いたことがありますか。これは、力を合わせて「犯罪や非行のない明るい社会、明るいまちを作りましょう」という全国的な運動で、今年で76回目になります。犯罪や非行をした人が立ち直れるようにするためには、地域の人の理解や見守りもとても大切です。7月は「社会を明るくする運動」の強調月間。「明るいまち」をつくるために、私たち一人ひとりにできることを一緒に考えてみませんか。

第75回社会を明るくする運動作文コンテストで、優秀賞を受賞した清水 莉緒さんに、思いをお聞きしました。

母が教えてくれた「つながり」の大切さ

清水さんの父は、罪を犯した人の更生を支える「保護司」の活動をしています。

ある日、家を訪ねてきた見知らぬ人への母の対応を通じて、清水さんは「つながりの大切さ」を学びました。

「話をしてつながりを感じるだけで、相手の心の安心になる」

その教えを胸に、清水さんは偏見を持たず、まずは相手を知ろうと耳を傾けることの大切さに気付きました。たとえ小さな関わりでも、確かに生まれるその「つながり」こそが、時に誰かを救う力になるのです。

「保護司」という存在

今回の出来事をきっかけに清水さんは「保護司」の活動について調べ、驚きと尊敬の念を抱いたといいます。

「更生を目指す人の心に寄り添い、人生の相談に乗る。その献身的な姿を知り、父という存在を心から誇らしく思いました」

「想像力」が、誰かの明日を明るくする

「人と接する時、先入観で相手を決めていませんか？ 相手にどんな背景があるのかと想像すること。それが思いやりの第一歩だと思います」

私たちが目には見えていないのは、相手のほんの一部に過ぎません。清水さんは、「その人自身」を見て接することの重要性を教えてくださいました。

「まずは身近な人への接し方から、一緒に意識してみませんか」

この真っ直ぐな問いかけが、今、私たちの心に温かく響きます。

第75回社会を明るくする運動作文コンテスト 優秀賞 日本更生保護協会理事長賞 受賞 有和中学校3年 清水 莉緒さん



第75回社会を明るくする運動

～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～



作文コンテスト 入賞作品はこちらから

法務省「社会を明るくする運動」中央推進委員会主催

一人ひとりの未来を信じて。

「罪を犯した人の更生を支える」という重要な役割を担う保護司。彼らを突き動かしているのは、制度でも義務でもない、一人ひとりへの深い愛情でした。10年以上活動を続けている有田保護司会会長の松林 昭吾さんと、副会長の武田 尚幸さんに、お話を伺いました。



有田保護司会 会長 松林 昭吾さん



有田保護司会 副会長 武田 尚幸さん

保護司とは？

犯罪や非行をした人たちの立ち直りを地域で支える「民間のボランティア」です。法務大臣から委嘱された非常勤の国家公務員ですが、給与は支給されません。

保護司であるということ

副会長の武田さんは、面接の日の心境をこう明かします。

「長年やっていても、面接の日の朝は『きちんと来てくれるだろうか』『どんな風に過ごしていたかな』と色々なことを考えます」

見守る対象の方の中には、心を開いてもらえるまで時間がかかる人もいます。交わした約束を、必ずしも守ってもらえるとは限りません。それでも、「担当になったからには見捨てない」という思いで、耳を傾け、向き合い続けるのが保護司だと語ってくれました。

一人ひとりの個性に、真っ直ぐ向き合う

「最後の面接の日に、『ありがとうございました』と言ってもらえる瞬間がうれしい」

会長の松林さんが以前担当した少年は、面接を重ねる中で進学を決意し、見事合格して保護観察期間を終えました。報告を受けた時の喜びは、何物にも代えがたいものだったといいます。「対象者はみんな一人ひとり違います。マニュアルはなく、その人に向き合い接する。保護観察期間が終わった後は、保護司から連絡をとることはしません。ですが、時々連絡をもらえたり、頑張っていることを知れた時は心底うれしく、安心しますね」

「明るいまちをつくるのに特別なことなんてありません」  
松林さんはそう話し、挨拶という「つながり」が孤立や再犯防止の支えになると語ります。武田さんも「平和なまちだからこそ、更生保護に関心を持ち、温かい社会を作る仲間になってほしい」と呼びかけます。  
お二人の言葉にある「つながり」は、地域の誰かを支える力。まずは日々の小さな挨拶から、このまちを明るい未来へ変えていきますか。

